

やまいとすくいの視点から見た幻声

大宮司 信

やまいとすくいの視点から見た幻声

大宮司 信*

I. はじめに

I-1. 本論考の目的

無いはずの声や音を聞くという幻聴は、統合失調症を中心とする精神の病気ではしばしば出現するが、特に人間の声が聞こえるというのが特徴的であり幻声と呼ばれる。その一方、人間にとって最終的な救済をめざす宗教、特にその開教時や信仰復興の際の心的体験の一つとしてもみられる。本論考では、宗教体験としての幻声の特徴を記述し、その結果から逆に精神医学が対象とすべき幻声の特徴を再検討する。こうした検討は、一方では何が人に救いをもたらす幻声かを明らかにするとともに、幻声という精神医学では周知でありふれた精神症状を見直す契機になると考える。

I-2. 精神症状としての幻声と宗教体験としての幻声

一般に、また素朴に、幻覚は「対象なき知覚」⁷⁾と定義づけられている。これに基づけば幻聴は「対象なき聴覚」ということになる。この単純化された定義では、幻聴を特徴付ける要素は、1. 知覚的体験であること、2. しかし一般的な聴覚と異なり、対応する外界の対象がないことである。

異常という言葉からすぐ連想されるのは2

の契機であるが、名称は1の契機から冠される。すなわち名称は知覚（幻聴の場合は聴覚）の面に帰されている。存在しない対象、聞こえないはずの音源としては、さまざまな物音・音楽・雑音など、音のすべてがありうるし、また実際の幻聴はそう言える。

しかし精神医学で対象とする、統合失調症をはじめとする幻聴でも、宗教体験（ここでは開教時や信仰覚醒時の啓示的体験）でも重要なのは、先に述べたように、人間や神などの人格的存在の「声」である。精神医学ではこの点を念頭におき、最近では「幻声」と呼ぶことが多い。言葉の普及度からは「幻聴」という言葉がよく使用されるが、以下の論述では、上述した精神医学・宗教の両領域における重要さから、対象を「幻声」に絞って論述をすすめる。

II. 宗教・信仰の中の幻声

II-1. 宗教体験としての幻声(1): 聖書における事例

宗教体験としての幻声にはどのような例があげられるだろうか。以下はよく知られた記事・逸話であるが、論の手始めとしてあげておこう。

資料-1-aは旧約聖書の預言者サムエルの子供時代の神との対話として伝えられる記

*人間福祉学部医療福祉学科

キーワード：幻声、宗教、統合失調症

事である。伝承・説話の類にすぎぬかもしれず、正面から資料として取り上げるには問題はあろう。ただし子供が夜間に声に呼びかけられ神の言葉を聞いたという記載は、幻声と睡眠や夢との関係が類推される。また子供に特有の「想像上の仲間 (Imaginary companion)」²⁾も考慮される。

資料-1-bは新約聖書の使徒パウロ (回心前の名前はサウロ) の回心の物語における幻声である。特徴的なのは、「光が彼の周りを照らした」ことと「地に倒れた」ことである。またこの体験をしたあと、パウロは視力を失い、のちにある信徒から癒されて目が見えるようになる。この「光を見る」、「一時的な視力喪失」という記述から、この幻声をてんかんによるという説明をする者がある³⁾。

II-2. 宗教体験としての幻声(2): 比較的身近な事例

前項で記述したのは、宗教と幻聴・幻声の議論でよく引き合いに出される事例で、しかも西欧・キリスト教世界に偏った聖書の中の紹介という制限がある。ただし調べればイスラム世界や仏教世界でも同じような体験はあるはずだと筆者は予想している。

次に日本において比較的身近にみられた宗教者の幻声体験を紹介してみたい。資料-2-aは新渡戸稲造の体験である。彼のような理性的な人間が若いころのこのような体験を記憶していることは興味深いが、内容的にはあまりはっきりとした声、少なくとも外界に定位した幻声ではなく、精神内界で聞いたとする幻声 (精神医学でいう仮性幻聴) に近いものかもしれない。

資料-2-bは、筆者が個人的に長い間の

交誼がある老婦人であるが、認知症の症状はまったくなく矍鑠として生きている。ここでは幻声をイエスの声と解釈して、一種の信仰覚醒に寄与している。

II-3. 新宗教の開教時の幻声体験

我が国における新宗教の開教の契機となる体験のうち、精神医学との関係が想定されるのは、幻視 (見神体験)、神がかり (憑依状態) と並んで、神・仏の声をきくという体験 (幻声) であろう。

新宗教教団・人物事典¹⁾には448名の新宗教の教祖名とその略歴が記載されているが、そのうち14名に幻声を疑わせる記載が読み取れる。資料-3にその一覧を記載する。

もちろん上記成書の編集者の裁量と判断による記載であり、「声を聞いた」といっても実際にどのようなであったかはかならずしも明らかではない。ただし少なからぬ宗教者が幻声ないしはそれに類似する体験を開教・信仰復興にさいして体験していることは裏付けられよう。

II-4. 教団・経典における幻声体験の記載

それでは教団あるいは経典では、こうした開教時の幻声体験はどのように記述されているのだろうか。ここでは岡田光玉 (世界真光文明教団) の場合を例に考えてみたい。前記の成書¹⁾では資料4-aのように記載されている。

一方同教団出版 (現在同教団は大きく二つにわかれ、同名の教団よりも娘の岡田恵珠が継承したとされる「真光」のほうが教勢では勝っている) の経典 (「御聖言」) では資料-4-bのように記載されている。

ともに声としての神の声を聞いたとは書いてはいない。ただこの部分には「天地一切神の声」という「声」という言葉が入ったタイトルがついており、また神の言葉と称するものも開祖への呼びかけという形となっている。こののちの神示のほとんどは教祖への呼びかけ、ないし信徒へのよびかけという形で「神の声」という形式を取っている。また教祖が激しい熱病の後にこの体験をしたことは身体的に疲弊した中で声を聞くという限界状況での幻声を思い出させる（なおまだ教団の分裂前、調査に対応してくれた某支部長から、「〇〇とは恐らくまちがいないところ『腹中』である」と聞いたことがある。時に幻声が「腹の中から聞こえる」と表現されることは精神科臨床のなかでそれほど珍しくはない）

宗教的体験は一つには宗教の成立のもっとも重要かつ神秘的な体験であるので、その実態がどのようなものであったかについての詳しい記載はなく、ただ事実だけが伝えられている場合が多いので、精神医学におけるリアルタイムで目の前にいる患者から直にその体験の有様を聞いたり、過去にさかのぼって確認しつつ何回もたずねるのは異なる。

このように宗教的体験における幻声を精神医学における記録と対等に並び比較することは平等を欠く。従って精神医学における幻声の記載から宗教における幻声を類推する方法が我々に残されることになると思う。次に精神医学・精神科臨床から、幻声について考えてみたい。

Ⅲ．精神医学からみた幻声—統合失調症の場合を中心に

Ⅲ－１．精神科臨床における幻声

精神科疾患の中には他種類の幻声が見られる。このうち特に重要なのは統合失調症における幻声である。

従来カルテの中の医師の記載が中心であった幻声は、最近は体験する病者によって記述されはじめている。そのような例を資料－５¹⁰⁾にあげる。

「なぜ、大の大人がこんなバカバカしい声に、運命を握られ支配されてしまうのか、不思議に思う人」のために、ある統合失調症の幻声体験者は幻聴の聞こえ方や特性について説明している¹⁰⁾。それによると、まず声の聞こえ方は現実の人の声を聞くきときはまったく異なり、自分の心をわしづかみにされているように感じるという。また、聞こえ方は非常に神秘的でおかつ「超リアル」であり、口調はかなり高圧的で命令的なものが多い。神の声であれば、ほんとうに天から降ってくるような感じで聞こえるし、地獄の悪霊の声であれば、地の底から響いてくるような感じで聞こえるので、本物と錯覚してしまうという。

Ⅲ－２．幻覚の定義をめぐって

加藤⁴⁾によれば、幻覚 (hallucination) はラテン語の *allucinatio* に由来し、間違う、思い違いをする、とりとめのないことを言うなどの意があるという。また英米圏での幻覚という言葉の初出は、ラテン語によって書かれたラヴァテール Lavater, L の著作の翻訳 (1572) においてだとされ、それは夜歩く幽霊や聖霊をさした。このさい、幻覚という語

には、幽霊や聖霊についてのまじめな話と、その話が事実にくわいむだ話であるというふたつの要素をみてとることができるという。

1800年代初頭に本格的に精神医学に導入されてからも、幻覚の術語はこのふたつの側面をもつ。すなわち、幻覚は、一方で、それを体験する当人にとってはあるものを知覚したという内的確信、他方でその確信が間違っていると他者による価値判断の要素からなる。

次に精神医学の立場からの幻覚の定義について、再度加藤の論述⁴⁾によってみていこう。最初の定義は、エスキロール Esquirol, J (1817) による以下のような記述とされる。

「その感覚をひきおこすいかなる対象もないにもかかわらず、いま現に感覚を知覚していると確信する人は幻覚状態にある。そのような人は幻視者である」

この定義では、幻覚の原因が幻覚を体験する者自身に求められている点が特徴で、医学モデルのなかで幻覚が規定されることになった論拠とみることができる。もうひとつの特徴は、幻覚が体験者の強い内的確信を指標として定義されている点である。

もっとも有名な幻覚の定義は、バル Ball (1890) によるとされる先にあげた「対象なき知覚 (perception sans object)」である。これは、幻覚を実際にはないものの知覚と捉えており、幻覚の錯誤性に焦点がおかれる。

問題は、幻覚を感覚のレベルにあるとするのか、信念のレベルにあるとするかで、ここから、幻覚の古典論の二大潮流となる、幻覚の本質を感覚に求める感覚論と、判断の障害による誤った信念に求める信念論が分岐する。

ただしこれはあくまで精神医学における幻覚、そして幻聴・幻声の定義・内容である。この項の始めにふれたように、幻覚は語義からは加藤⁴⁾の指摘のように「思い違い、とりとめのないこと」をいい、錯覚や幻想などとも判然と区別しがたい内容であったことが予測される。後にふれるが、宗教における幻聴・幻声は、精神医学と比較すると、むしろこちらとの親和性が強いのではないだろうか。

Ⅲ-3. 幻声・幻聴の脳科学

一方最近の脳科学の進歩は、幻覚の生物学的な本態と定義をめざそうとする。岸本⁵⁾によると、脳血流量測定法 (SPECT) を用いて統合失調症、覚醒剤依存症、アルコール依存症、てんかんなどの精神疾患の幻聴時を調べると、左聴覚野、聴覚連合野などの脳部位で活性化が見られるという。一方、幻聴と関連して、帯状回、視床も幻聴時に活性化することで注目されている。

こうした知見から、幻聴の神経機構は健常者の、聴きつつ語り、語りつつ聴く言語活動に関わる神経回路の活性化として理解でき、幻聴のもつ強い現実感を裏づける生物学的知見であろうと八木¹⁰⁾はいう。

また岸本⁵⁾によれば頭皮上より左側頭・頭頂葉を磁気刺激することによって、難治性の幻聴の治療が可能であるとの報告もみられ、幻聴を脳科学から理解する時代を迎えているという。

こうした結果は、「対象なき知覚」であろうとも、脳の中では「知覚」として把握されている現象ということになる。それでは幻覚・幻聴は単なる知覚・聴覚の中枢性障害なのであろうか。

Ⅲ－４．「聞く」と「聞かせられる」

幻聴が単なる聴覚障害であり、ないはずの音や声がきこえてくるという、いわゆる「空耳」（そらみみ）であるのなら、「聞こうとしなければいいではないか」「聞こえてきても無視すればいいではないか」という意見が出るかもしれない。

しかし体験する病者にとって、幻声はそんなにまよさしい現象ではない。幻声の「聞こえる」という表現は、もちろん「聞こえてくる」のであるが、自らが好んで聞くのではなく、むしろ耳を塞ぎ聞きたくない嫌悪感があるのに聞かせられる体験であることである。これはムクの「叫び」という名画を思い出すだけでも十分であろう。幻声は「聞く」「聞こえてくる」というよりは「むりやり聞かせられる」のである。「聞きたくない」という拒否にも関わらず受け身的に「聞かせられる」体験が幻声の基本形である。この点を理解しようとして思い出される事例としては資料－６の航空機墜落事件の機長の体験である。

注目しなければならないのは、滅多なことでは動じることのない、おそらくあらゆる職業のなかでもトップクラスの自制力を習得しているはずの航空機の機長にも関わらず、この幻の声に抵抗できず、聞き従わざるを得ない状態になってしまった点である。体験者は幻声に勝てないのである。

Ⅲ－５．幻声と注察妄想

また、幻声を知覚の異常と把握するのに、別な議論もある。聴覚に比較される視覚における幻覚は幻視である。しかし幻声が「聞かされる」という受け身的な行為であるに対し、

同じ知覚であっても「見る」「見える」という幻視は自動的である。ツット¹¹⁾が述べるように自らの病的体験として考えた場合には、聴覚にあらわれる幻聴に対比される視覚上の体験は幻視ではなく、「見られている」という意味での注察妄想であるという。体験者の受け取り方という視点からは、幻声に示される問題点の本質が知覚に現れる結果が幻声となり、知覚的であるかどうかは二次的となる。

Ⅲ－６．「自己への侵襲性」

聞こえてくるはずのない音が聞こえてくるという聴覚的な部分に注目するか、あるいはそれによって自己がどのように侵害されるか、重荷となるかというふたつの研究上の流れは、常にこれまでの幻聴研究の中に存在してきた。もちろん幻聴は統合失調症だけに限っても、それだけを自己完結的に考えるべきではない。妄想やその他の体験とも深いつながりをもつ。

先に述べたように、最近の脳科学の中には幻覚一般を脳の中のある特異的な部位の障害として考えていこうとする流れが存在する。考えてみれば幻声・幻聴だけではなく、例えば幻肢を考えれば明らかなのであって、切断したはずの足が痛むのはその足の知覚に関する幻覚と言うよりは、むしろ知覚神経を介してつながっている脳の部位の障害と考えれば、何も「幻（まぼろし）」と考える必要はなくなる。

同じように、ないはずの音が聞こえるという現象を、脳の聴覚部位の障害としてみていこうとするのはもちろん1つのアプローチの方法としてはあり得る。しかし先に述べたように、精神障害、とりわけ統合失調症における幻声は単にないはずの音が聞こえるといっ

たなまやさしい物ではなく、聞きたくないのに聞かされ、しかも自己の考えや行動を制約しあやつる。これが病気としての幻声の特徴である。

もちろん飼いならされた幻声は、「聞こえていても気にならない」といった形で患者の中で安定性を保つ場合もある。問題なのは上述した自己に対する侵襲的な態度を幻声が取ることであり、それがまさに精神科臨床の治療の目標となる。関根は豊富な統合失調症の幻声の代表的な症例記述に加えて、このような幻声の特徴に対して控えめであるが、「実体的被侵襲感」という言葉を与えている⁹⁾。本論考では、体験者の視点から幻声の特徴のひとつとして、「自己への侵襲性」という言葉を仮に与えておきたい。

Ⅲ-7. 現在症と消退過程からみた幻声

これまで統合失調症の幻声体験の内容は、言語化できる余裕がある患者から述べられてきた。一方精神医学という治療学の立場からは、それがいかにして消えて行くかという過程が注目され、幻声に対する治療という行動を加味した中から解明の糸口をみつけようと進められてきた。

現在症からみた幻声は先に述べた様に統合失調症の場合には人の声でしかも自己への侵襲性を有しているが、一方消退過程から見る場合には、「聞こえなくなる」というよりもまずは「幻聴に対する思い入れやとらわれがなくなり」「疎遠化して」その後になくなっていくという実体験が語られる。

場合によっては幻声のもつ自己への侵襲性がなくなり、寂しいと述べる場合もある。一方この声は患者に対して強い制約を与えるも

のであって先の航空機の機長のような行動を含み一番の恐るべきは自殺を促すような声である。しかしこのような消退過程は即幻声の成立過程の逆ではない。すなわち次第に声に対する関心が向いてきて幻声が成立するということはありうるが、しかしそれが全てではない。

Ⅳ. 宗教の中の幻声

統合失調症を代表とする精神疾患にみられる幻声にくらべ、宗教の中における幻声の働きは、本人に安堵を与えるほか、宗教の成立自体にも関与し、それまでの宗教的な体験を新しく問い直したり新しく体験しなおしたりするといった字義とおりの意味での画期的かつ積極的な体験となる。

幻声が一方では疾病という人間にとって不利益な状態の症状として、また他方では宗教や信仰という人間にとって生きがいを与える契機となる違いが何処から由来するか、もちろんそう簡単には言えない。

統合失調症を中心とする精神疾患にみられる幻声・幻聴と同じように宗教的体験としての幻声も、外からの声として、例えば「神の声として聞いた」といったかたちで記載されているものが多いが、その実態はあまりはっきりしない。記述上の例えや表現であったりもしよう。実際に外界からの声として知覚的に捉えられた幻声（真性幻聴）ではなく、内界の表象の中で聞こえてきたと感じる幻声（仮性幻聴）の可能性が、宗教の中の幻声の記載には多いように演者は感じている。

しかし、だからといってそれらの幻声は単に日常的に他人の声を聞いたとか、他人から何か啓発的なことを言われ、それを聴覚を介

して受け取ったということではないであろう。ないはずの声が聞こえてくるという意味で非日常的であり、本人にとっては奇異な体験であつたろうと思われる。こうした日常的な体験を超える体験こそが、宗教をささえるひとつの要素と考える（もちろんすべてではない）。

両者の相違として指摘できる可能性があるのは、先に述べた自己への侵襲性という仮に定めた述語にあらわされる部分ではないだろうか。この点が両者を分ける違いと思う。宗教における幻声は統合失調症における幻声のように、自己への侵襲的な声として聞こえ、脅かされ、さらには行動が取れなくなってくるようなものではない。

統合失調症に近い幻声が宗教・信仰の中にあられるとすれば、たとえば森口⁶⁾が資料-7にしめす仏典アーガマに挙げられる尼僧の例がそれに近いのではないか。この場合は魔の存在の声という位置付けがあたえられていて、これまで例示してきたような救済者の声ではない。

もちろん本論考では取り上げなかった、このような幻声をどのように受け止めるかという本人の受け止め方は見過ごせない。もともとの人格性・知的レベル・受容力の有無などが問題となつてこよう。

しかし精神医学に見られる幻声はそうした力を遙かに超える強い力を持ち、そして自己に対して侵襲的である。逆に自己侵襲的ではないが、あくまで非日常的であること（幻声の場合、「ないはずの声」がきこえること）が、新しい境地を切り開くという意味合いにおいて幻声が宗教の一部に意味をもっていると考ええる。

【文 献】

1. 井上順孝ほか（編）：新宗教教団・人物事典。弘文堂、東京、1996
2. 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 想像上の仲間 — 文献の展望。精神科治療学、5：1435-1444, 1990
3. 伊東高麗雄：パウロ。日本医事新報、3071：63-66, 1983
4. 加藤敏：幻覚（土居健郎ら（編）：異常心理学講座第6巻：107-170, みすず書房、東京、1990)
5. 岸本英爾, 大谷健, 成田博之：幻聴と脳画像。Schizophrenia Frontier. 4：108-111, 2003
6. 森口眞衣, 大宮司 信：初期仏教経典『アーガマ（阿含）』における精神病理学的記述。日本精神病理・精神療学会第33回プログラム抄録集：102-103, 2011
7. 中安信夫：幻覚（加藤正明ら（編）：新版精神医学事典, p. 202, 弘文堂、東京、1993)
8. 新渡戸稲造：『新渡戸全集』23巻、p. 691頁（邦文：鳥居清治訳）。（大山綱夫：札幌農学校とキリスト教, EDITEX、東京、2012, 第6章 内村鑑三と新渡戸（太田）稲造のアメリカ滞在期体験, p. 238より引用)
9. 関根義夫：精神分裂病の幻覚体験について。（保崎秀夫（編）：精神医学レビュー, No. 31, 幻覚. pp. 5-20, ライフ・サイエンス、東京、1999)
10. 八木剛平：手記から学ぶ統合失調症—精神医学の原点に還る, 金原出版、東京、2009.

11. Zutt J. : Blick und Stimme-Beitrag zur Grundlegung einer verstehender Anthropologie. Nervenarzt 28 : 350-355, 1957

【資 料】

【資料-1】宗教体験としての幻声(1)：聖書の中の事例

a. サムエルの幻声体験

サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。主はサムエルを呼ばれた。サムエルは、「ここにいます」と答えて、エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言った。しかし、エリが、「わたしは呼んでいない。戻っておやすみ」と言ったので、サムエルは戻って寝た。主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」と言った。サムエルはまだ主を知らなかったし、主の言葉はまだ彼に示されていなかった。主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。」サムエルは戻って元の場所に寝た。主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ。」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」主はサムエルに言われた。「見よ、わたしは、イスラエルに一つのことを行う。それを聞く者は

皆、両耳が鳴るだろう。その日わたしは、エリの家にご報告のことをすべて、初めから終わりまでエリに対して行う。わたしはエリに告げ知らせた。息子たちが神を汚す行為をしていると知っていながら、とがめなかった罪のために、エリの家をとこしえに裁く、と。わたしはエリの家について誓った。エリの家罪は、いけにえによっても献げ物によってもとこしえに贖われることはない。」サムエルは朝まで眠って、それから主の家の扉を開いた。サムエルはエリにこのお告げを伝えるのを恐れた。(新共同訳聖書、サムエル記Ⅰ：3章3節～15節)

b. パウロの幻声体験

さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。(新共同訳聖書、使徒言行録：9章1節～8節)

【資料－2】宗教体験としての幻声(1)：わりあい身近な事例

a. 新渡戸稲造の幻声体験⁸⁾

太田（後の新渡戸稲造：筆者）は、1882（明治15）年5月3日付の宮部宛英文書簡の中で、二年前すなわち在学中、札幌の大自然の中である神秘体験をしたことを伝えた。これは、在学中に宮部らとの集まりの席でも話したことがあるという。「僕は自分自身の内にまた外に、一つの“神”（原文は a God）を感じたのだ。僕は僕の内に小さなかすかな声聞き、その声に威厳にみちた、荘重な“声”が外から応えたと感じた。その声は、“言葉”なのかもしれないが、僕には声だけがきこえて、“言葉”の発音ははっきり聞きとれなかった。僕は、もしその“言葉”が神の声なら、その“言葉”を開かせて下さるように願い、神にたえず祈っている」。

b. キリスト教信者の一婦人の幻聴体験

（ここに記述する幻声体験をした婦人はささいなことで、知人と仲違いをし、悩んでいた。そのような状況のなかでの体験）。

苦しみのあまり眠ることも出来ず、苦しくて苦しくて、何度も寝返りをしながら、2時間位過ぎたとき、私の右側の斜め上の方で静かな声が聞こえました。「いいの、いいの、そのままがいいの」と低い声、それは今迄聞いた事のない男の人の声でした。なまりもなくすーと聞こえてきました。「そのままがいいの」との声で、私は飛び起きて声のした方を見たのですが、何も見えなく、イエス様の御声でないかしら、あー許されたんだと思った瞬間、心の塊がすーと消えて行きました。目の前の時計は夜の12時でした。この罪だら

けの自分を許して下さったんだと思った時は、涙が出て泣けて、心は慰められ、安らかな静かな平安が頂きました。その場で祈って、こんどは嬉しくて横になったらスーツと朝まで寝てしまいました。（2007年ころの体験、記載にあたっては、ご本人からこの体験記述を学会発表、論文発表を前提に、個人的な部分を省略して記載する許可を得て文章として書いていただいた。ここではその一部を記載）。

【資料－3】新宗教教祖の幻声（新宗教教団・人物事典¹⁾）

a. 会田ヒデ（世界心道教）

昭和13年3月13日、朝のおつとめをしていると「三社三棟知っているか」と声がし、月読と名乗った神に「三社三棟は火水風のことで、火と水とが一の神、風よりほかに神はない」と教えられると同時に国狭土之命の声も聞く。以後天からの指示を何かにつけ聞くようになったという。

b. 内垣日親（日本ヴェーダンタ・ソサイティ）

ある時、南無妙法蓮華経と唱えると、目の前に日本地図が現れ、神戸と大阪と京都の中間（現在の本部がある大阪府高槻市の付近）に日本の旗が立ち、「この法もて日本を風靡すべし」という天の声が聞こえる。

c. 大森智辨（辨天宗）

昭和9年4月17日、最初の神がかりを経験する。庭先で草むしりをしていると、とつぜん気を失い、夢うつつのなかで辯才天の声をきく。

d. 岡田光玉（世界真光文明教団）（後述：資料－4）

e. 岡野聖憲（解脱会）

昭和4年の正月、故郷の北本宿に初詣に出掛けたとき、生家付近の一本松の小祠近くで「圧倒的な力」に打たれ、「太神を世に出せ」という声を聞き、開教の啓示を受ける。

f. 小川耕一郎（八楽会教団）

18歳のとき天理教の信者に天理教のことを教えられる。このころ、ただ念仏を唱え合掌するよりも、すべて天地一切の神に預けようと悟り、守り神を日本国家の大祖先である卑弥呼霊にしようとしたところ、「何も考えるな、働け。ただ、まっしぐらに働け」という神の言葉が聞こえたと言われる。

g. 折茂なみ（大日然教）

10月7日、真心を込めて神棚に向かい、「ある命ならばお救い下さい」と願ううちに神がかりになり、「せがれの一命ならば諦めなされよ」と声を発する。三日後次男は死亡、その後働こうとしても身体が苦痛を感じて動けなくなったり、「そなたや子供が食するぐらいのことは神が与えるから心配はいらない」という言葉を発したりするようになる。意識は明確だが、胸から神の言葉も聞こえてくるので、自分の霊能を確かめるために、高名な霊能者や宗教家を訪ね歩く。

h. 川合信水（基督心宗教団）

23歳の頃には、自分が世に知られる機会のないことを嘆いた瞬間、「我は汝を知って居る」と告げる神の声を初めて聞く。

i. 北村サヨ（天照皇大神官教）

昭和19年5月に腹中に入った何か語りかけるという体験を持つ。自ら神と称する肚の中のもの「水をかぶるのばかりが行ったら、川の魚はみな天にのぼる」と言ってサヨに心の行をさせたという。

j. 五井昌久（白光真宏会）

数十日の絶食状態のなかで、一切個我的な考えを出さず、一挙手一投足がすべて神霊のなすがまという修行に身をさらす。こうした経過を経た一夜、神霊との問答がなされ、

「これで問答はやめるが、明日の晩には何か変わったことが起こるだろう」という言葉とともに、神霊からの直接的語りかけ働きかけはおさまる。

k. 小松神擁（神命愛心会）

ある友人からあなたには霊が降りると言われてまもない昭和51年（1976）7月、天照大御神の神言を受けるという体験をする。すなわち、この年の春、先祖の霊があらわれ、やがてあって龍王、観音、そして最後に天照大御神が降臨したという。神が龍体に乗ってはじめて出現したとき、「豊栄の舞」の歌が聞こえ、「澄み切りましょう。人の心」という声が聞こえた。

1. 鈴木啓月（大本元教教団）

昭和19年（1944）に、日本は負けると言われたため、不敬罪で逮捕され十数日投獄される。釈放後、これからどうしたらいいだろうか、と板橋区の氷川神社にお参りにいって伺いをたてたところ、「信濃の国に天下れ」という神の言葉があったという。そこで、すでに東京には信者が数多くできていたが、同年12月19日に八ヶ岳の麓にはいり、6年間修業をする。修行中の昭和22年3月7日の深夜、ある女性が訪ねてきて、どうしても助けてくれと言うので祈っているとき、初めて神がかかる。神は「我は宇宙大元霊の神なるぞ」と告げ、「時は来たぞよ、汝身体借用する」などといった四カ条の言葉を述べたという。

m. 谷口雅春（生長の家）

ホルムスの哲学以後心をいかにコントロー

ルするかに思いをはせていたあるとき、静座合掌瞑目していると、突然威圧するような声で「物質はない。実相がある。実相とは神である」と聞え、目の前に日の出のような光が燦爛と満ちあふれたとされる。ついに神を見出し、不滅の生命としての自分を見出したと感じた谷口は、この悟りの喜びを人類に伝えたい思いにつき動かされる。

n. 波瀬善雄（霊波之光教会）

四国香川県の五剣山（教団では霊峰山と称す）に登り、とある堂で連日座禅を組んでいると、13日目、一陣の風とともに白髪の老人が現れ、満足そうにうなずき「不思議はこれからじゃよ」という意味ありげなことをつぶやいて消える、という体験をする。21日間の座禅の後、感覚のなくなった体を引きずって山頂に登り始める。途中で倒れこみ、力尽きてそのまま横になっていると、天から白雲が舞い下り、体の中に吸い込まれ、「なんじ生きよ、なんじは神の使いなるぞ、なんじ、神の道を行け」という声を聞き、その瞬間病気が癒される、という体験を持つ。その日は、ちょうど教祖24回目の誕生日のことであったという。

【資料－4】岡田光玉（世界真光文明教団） の場合

a. 昭和34年の2月27日、58歳の誕生日に、立教に関する神の最初の啓示を受けたという。すなわち、高熱による五日間の昏睡状態から目覚めた午前五時に、次のような神の声を聞いた。「天の時降到れるなり。起て、光玉と名のれ。厳しき世となるべし」。主の神から人類救済者としての「み役」を与えるという神示を受け、同時に、光玉の神名を賜ったの

である。（新宗教教団・人物事典¹¹⁾）

b. 昭和34年2月27日午前5時、高熱による五日間の人事不省から醒めた私は、立教に関する神の最初の啓示をいただいた。このときの状況は、現代の唯物科学的な知識をもってしてはとうてい解明すべくもない、まさに神啓接授の妙機とでもいうより外はない不可思議な瞬間であった。

（世界真光文明教団：御聖言、2-3頁）

汝、その奥を語らしめられん。神理のみたま、汝の〇〇に入る。汝その聞く所を語らん。天の時到れるなり。起て、光玉と名のれ。厳しき世となるべし。

（世界真光文明教団：御聖言、24頁）

【資料－5】統合失調症患者の幻声体験⁹⁾

朝の目覚めとともに幻聴とのつきあいが始まります。布団の中で「さっさと起きろ。今日は買い物にいくぞ。早くしろ、寝ぼすけ」という声に起こされ、朝食の準備をしている間もずっと声は聞こえています。聞こえる気がするのではなく、本当に声が、はっきり聞こえるのです。「バカ、まずい、まずい」という声を聞きながら朝食をとり、カーテンを開けようとする、「隣の人が見ているから駄目だ」と言われ、また閉めます。

・・・ちょっと買い物に出かけても大変です。

<夕食の献立は刺身、ワケギのぬた、もずくの酢の物、栗ご飯・・・>と考えながらスーパーに入ると、幻聴がいろいろな指示を出します。

幻聴A「お刺身は食中毒が危険だから食べたくない。カレーが食べたい。」

幻聴B「カレーはコレステロールが多いから
駄目よ。果物を買きましょう」

幻聴C「何も食べたくない。かわいいお洋服
がほしいの」

Aの声に従い、かごに入れた刺身を元の所に
戻し、牛肉を買おうとしますが、Bの声に
従い、牛肉を戻して果物売り場へ向かいます。
ところがCの声が聞こえてきたので、すべて
の食材を元の所に戻し、二階の洋服売り場に
行きます。私は店内を右往左往する挙動不審
の主婦です。

幻聴D「そうだ、百万円のダイヤの指輪を買
いましょう」

さすがに理性のブレーキが働きます。そんな
大金もカードも持ち合わせておらず、この
危ない幻聴からは救われます。

帰り道、本屋の前を通ると「洋書を買おう」
という声が出て、つい買ってしまいます。と
ころが五分もたたないうちに「そんな難しい
本、おまえに読めるわけないだろう。さっさと
捨てる」と言われ、買ったばかりの本はごみ
箱に。

【資料一 6】航空機墜落事故の機長の幻聴体験

この機長は、1982年2月9日、福岡空港から
出発するDC8・61型機に乗員7名、乗客
166名計173名を搭乗させ、同機を操縦して同
日午前8時44分ころ東京国際空港滑走路南端
から、約960メートル先の海上、高度約200
フィート付近を着陸のため航行中、操縦桿を
押しして異常に降下させ、エンジンの逆噴射装
置操作レバーを操作してエンジンを逆噴射さ
せ、空港の南東方向約360メートル先の海上
に墜落させ乗客ら23名を死亡させた。

後に本人が供述したのは次のような様態で
あった。2月9日福岡発羽田行の上記便を操
縦して離陸してから、怖ろしい考えが浮かび
上がってきた。「二派に別れて対立している
日本全国の状況の中で自分の派がやられ次々
につかまって拷問にかけられている」という
考えが浮かんだという。そして羽田空港に接
近して自動操縦を手動に切り替えたのち、
「イネ、イネ」という幻声が聞こえ、本人は
それを「死ね」という意味に解釈し、その体
験に圧倒されて航空機を墜落させるような操
縦行為を行ったと判定された。本件は心神喪
失と判定され、不起訴となった。

【資料一 7】アーガマにおける幻声：尼僧に 語りかけるマーラ（魔）の声⁶⁾

（『サンユッタ・ニカーヤ』第1集第5篇
（尼僧についての集成）第2節）

サーヴァッティー市がゆかりの場所である。
そのときソーマー尼は、早朝に衣をつけ、鉢
と衣を手執って、托鉢のためにサーヴァッ
ティー市に入って行った。サーヴァッティー
市で托鉢したのち、食後に、食事から還って
きて、昼間の休息のために、ある樹木の根も
とに坐した。その時“悪しき者マーラ”は、
ソーマー尼に、身の毛もよだつほどの恐怖を
起こさせようとして、瞑想から離れさせよう
として、ソーマー尼に近づいた。近づいてか
ら、ソーマー尼に向かって、詩を以て語りか
けた。「達成しがたくて、仙人たちのみが体
得しうる境地は、二本の指ほどの智慧しかな
い女人がそれを体得することはできない」と。
そこでソーマー尼はこのように考えた。「詩
をとなえているこの者は、誰なのだろうか？
人間なのだろうか？ あるいは人間ならざる

者なのであろうか？」と。つづいてソーマーニは、このように思った。「これは “悪しき者 マーラ ” が、わたしに、身の毛もよだつほどの恐怖を起こさせようとして、瞑想をやめさせようとして、詩をとなえているのだ」と。そこでソーマーニは「これは “悪しき者 マーラ ” である」と知って “悪しき者 マーラ ” に詩 で語 った。「心がよく安定し、智慧が現に生じているとき、正しい真理を観察する者にとって、女人であることが、どうして妨げとなるのでしょうか。『われは女であらうか？』『われは男であらうか？』また『われは何者なのであろうか？』と、このように迷っている人こそ、 “ マーラ ” が呼びかけるのにふさわしいのです。」そこで “悪しき者 マーラ ” は、「ソーマーニはわたしのことを知っているのだ」と気づいて、うち萎れ、憂いに沈み、その場で消え失せた。

(付) 本論文の要旨は日本宗教学会第71回学術大会にて発表した。